

鳴鶴流第二代

御手洗南溪頭彰碑（床木ダム畔） の篆刻文解説

木 許 博

（会員・佐伯市木立沖）

碑の建立

平成八年三月八日除幕、弥生町文化事業の一環となっている文学碑建設行事であり、発起人は同町文化協会長古藤田太氏、碑文は床木仙床寺（臨済宗妙心寺派）本堂左右の柱にかけられた南溪筆篆刻額それぞれ七字句の複写を並記の形で刻んである。

本堂額——縦一五二^二/_三 横十八^二/_三

碑の文面——縦一六四^二/_三 横六十一^二/_三

所在地——弥生町床木ダム事務所の向い側の空地、県

道36号線佐伯津久見線沿い

背 面——篆刻文の読みと訳は筆者、略伝揮毫は仙床

寺住職田中教道師

○墓前の碑文（題字は「信可楽也」へ篆書）天溪

鳴鶴流第二代御手洗南溪先生は生涯に亘り鳴鶴流の本分である正字を貫き祖師日下部鳴鶴の創立した近代書道の骨格の上に更に肉付してその温厚篤実なる人格と併せて豊潤温雅なる書風を樹立せり第三代岡村天溪はこれを継承し更に整正を重ね第四代南鶴溪に相伝せり平成四年五月南溪先生五十回忌法会に際して直流天溪会は鳴鶴流の真髓を広く世に流布し発展せしめんことを墓前に誓うものなり

一九九二年五月二十三日

願主 鳴鶴流第四代南鶴溪

○御手洗南溪略歴

明治十年（一八七七）弥生町床木岡田（佐伯方面から床木トンネルを出て四叉路を渡った右手の小集落）に生まれ、名は嘉佑、字は正郷、号は南溪、十八才の時上阪。二十四才で横浜に移り三十才で東京に出る。大阪毎日新聞社副社長矢野龍溪（佐伯市出身）の紹介により日下部鳴鶴に師事し書を研鑽。以後の活躍は前掲墓前の碑文のとおり。また大正から昭和にかけて拾銭紙幣原稿や戦前

の書道の教本を書くなど、当時日本を代表する書家として活躍した。しかし晩年は不運にも太平洋戦争のさ中であり、病を別府で療養。間もなく郷里に近い佐伯市藤原（現旧国道筋）で子弟に教えながら静養につとめた。名聞を求めず、書作に専念の毎日であったが、昭和十八年（一九四三）戦争苛烈のなか、六月十一日行年六十七才をもって生涯を閉じた。先生の直筆に成る墓碑の文字が菩提寺仙床寺の境内に「御手洗南溪之墓」とだけ端正な隷書体で刻まれている。

・顕彰碑文背面にある仙床寺住職田中教道氏のまとめられた南溪略伝を要約させてもらった。

・日下部鳴鶴―天保八年（一八三七）〜大正十年（一九二一）、彦根の人、明治のはじめ清の揚守敬の書法を学んだ。その書法は鳴鶴流といわれ一世を風靡した。書道界の東の横綱と称された（因みに西の横綱は、巖谷一六で野津川登小学校にある二孝女碑もこの人の書）

解読の過程

七言二枚の刻印板らしい写真を提案された平成八年一月、読みづらい文字もあったが、床木の寺の本堂篆刻な

であることがわかり、解読のヒントがすこしながらかつめた。

（一）二句の出典ないし傍証となる資料、情報

（1）七言の二句は形は漢詩の絶句あるいは律詩（第三四句または第五六句）とも見えるが、句の趣意、内容からすると漢詩ではなく、「法句集」か「禪林句集」のたぐいと推定。南溪の自作ではなく、仙床寺（禪宗）関係の依頼を受け篆書を以て応じたものと推測する。

（2）平成四年六月、南溪没後五十年記念作品展示会が市内寿屋を会場にして前記古藤田太氏の発起、臼井龍峰門下生による協賛で開かれた際、カメラに納めていた数枚の扁額や掛軸の写真が手元にあるが、いずれも楷、行書体で篆、隷風の書体のものではない。

（3）仙床寺を訪ねて本堂の篆額、境内の南溪墓碑、墓前の碑などを調べ写真に撮る。

（4）田中住職によれば天溪会（前掲墓前の碑文中）の関係者は現在中国に書碑建設のために滞在中であり、連絡のつては今のところ無いとのこと。とすれば手がかりとなりそうな南溪作品集など、仮にあるとしても当分

入手困難と思われる。また前出の扁額や掛軸所蔵者からも殆んど情報は得られず。



仙床寺本堂の篆額

・字典には、次頁の各枠内の文字以外にも数多く出ているが割愛して南溪篆書文字の字形に關係あるいは近似するものを記入した。

・因みに「朝陽字鑑精萃」（今秋入手）では、例えば「人」は三十二の書体、「華」は二十六の書体が挙げられている。詳しくは今回の検証作業には用いず。

（参考）中国の文字の歴史（概略）

甲骨文字（亀甲獣骨に刻）→ 金文 → 大篆 →

殷墟文字とも

鐘鼎文とも 周の時代

殷の時代（BC 1000 ころ） 周の時代（BC 1000 ～ BC 200 ころ）

小篆（篆書） → 隸書 → 楷書

秦の時代（BC 200 ころ） 秦の時代 漢の時代（BC 200 ～ AD 200 ころ）

南溪の篆書は中国篆書時代及び遠く甲骨文字の世界にまで集字範囲を広げて創意を凝らしており、端正で情味ある結構が観る人を惹きつける。

（二）篆字十四字の検証

「篆書印譜字典」（平成七年入手）から

南溪篆書文字の原形と思われる字形を小篆、印篆、金文、

甲骨文から抽出した一覧表を作ってみる。

契	同	欣	草	香	人	美	隣	結	定	華	梅	士	高	篆字
○契	△同	○欣△帳	○艸	○香	△人	△美	○隣	○結	△定	△華△攀	△果	△士	△高	小篆
△契△契	○同△同	△欣△欣	△艸△艸	△香△香		△美△美△美	△隣△隣	△結	△定△定	△華△攀	△果	△士△士△士	△高△高	印篆
					○人	○美			○定	○華△攀	○果	○士△士	○高	金文
	○同				△人								○高△高	甲骨
契	同	欣	草	香	人	美	隣	結	定	華	梅	士	高	漢字



除幕式

○印は南溪が原形としたと
思われる字形
△印は近似関連の字形

(三) 語注

(ア) 高士(コウシ) 志高く節を持つことの堅い人、品行の高尚な人、在野の隠君子、人格高潔な人、山林などにかくれている有徳の人

(イ) 某(バイ、ボウ)(それがし)「梅」の本字、自己の謙称、代名詞、或る(もの)

(ウ) 定(テイ)(さだむ)さだまる、やすんじる、やすらか、定、静、住、変動しない、きまる、ととのう、修め直す

(エ) 結(ケツ)(むすぶ)交わる、親しむ

(オ) 結隣(ケツリン)近隣と交わりを結ぶ

(カ) 美(ビ、ミ)(うつくし)うまい(甘)、うるわしい、よい(善)、めでたい、ほめる、正しい

(キ) 美人(ビジン)美女、美男子、君子、才徳すぐれた人、賢い人

(ク) 艸(ソウ)(くさ)草の本字、艸(くさかんむり)の原字

(ケ) 香草(コウソウ)かおりよき草(花)

(コ) 欣(キン)(よろこぶ)よろこぶ(喜)、たのしむ

(楽)

(サ) 同(ドウ)(おなじ)ななかま、つどい、おなじくする、一つにする、共にする

(シ) 契(ケイ)(ちぎる)きすな、因縁、約束、ちかい、交わり(親しく固い)

(四)「美人香草」とは「君主、君子」のこと

(1)大漢和辞典(巻九)に次のような説明と出典文例が載っている(訓読み、傍点、注は筆者)

「屈原の離騷は美人を君主に比し、香草を君子に比しているので、後、その文を「美人香草の辞」という」

・〔楚辞、離騷〕

草木の零落れいらくをおもい美人の遅春おそはる(仕官のおくれ)を恐る、昔三后こく(后は君、夏の禹王、殷の湯王、周の文王)の純粹なる、まことに衆芳しゅうほう(多くの賢臣)の在るところなり

・〔注(朱熹)〕

美人は懷王かいを謂うなり、人君服飾美なり故に美人と言うなり、衆芳は群賢ぐんけんに喩う

(懷王—屈原が仕えた中国戦国時代の楚の王)

・〔王逸、離騷經章句〕

離騷の文は……類を引ききて譬喩す。故に善鳥香草[○]以て忠貞に配し、惡禽臭物^{あくきんしゅうぶつ}以て讒佞^{ざんねい}（人をおとしいれ長上にへつらう）に比し靈脩^{れいしゅう}（君主[○]）美人[○]以て君にならぶ

(2)新釈漢文大系(34)「楚辭離騷」の全文から「香草」にあたる表現を拾ってみると

・蘭芷^{らんし}變じて芳しからず、荃蕙^{せんけい}は化して茅^{ぼう}となる（蘭、

芷、荃、蕙[○]香草の名）

・鵝鴒^{こりやう}（もず、惡鳥とされる）の先ず鳴きてかの百草をして之が為に芳しからざらしめんことを

・余が馬を蘭皋^{らんこう}（蘭の咲く沢）に歩ませ椒丘^{しょうきゅう}（山椒の茂る丘）に馳せてしばらく止息^{とく}す（蘭、椒[○]香草の名）

・朝に木蘭の墜露^{ついでろ}（したたる露）を飲み、夕に秋蘭の落英^{らくえい}（こぼれ落ちる花びら）を餐^くう（木蘭、秋蘭[○]香草の名）

・何れの処にかひとり芳草なからん

〈補足〉

離騷―楚辭の篇名、離は罹、騷は憂、うれいに遭う意、

屈原が憂愁、幽思して作つたもの

楚辭―楚の文章の意、楚の屈原の辭賦とその門下及び後人の作とを集めた書、漢の劉向の篇という、後漢の王逸が自作の「九思」を加えて十七卷（広辞苑）

屈原―（BC 342～BC 277ごろ）中国戦国時代（周末）楚の人、

名は平、字は原、懷王、襄王^{じやう}をたすけたが讒^{ざん}せられて江南に遷され、楚国の亡びる運命を見るに忍びず、汨羅^{べきら}に投身、楚辭にその賦を収める（全右）

(四)「梅花」

「まさに君子の節に儼^{なら}ぶべし」（梅花譜併序、唐宗瑒）〔大漠和卷六〕（梅の花と君子の節操とは夫婦の間柄のごときもの）

右の句の「君子の節」は梅花によせる精神内容を象徴的に示している。また、高潔、清廉、隱逸、脱俗、徳、孤高などの概念が古来詩文に梅花と比べてとりあげられてきた。絵画では四君子の一つ

(六) 読み

(1) ふつうの読み方としては

高士梅花定結隣^ム

(こうしばいかけつりんをさだむ)

美人香草欣同契^ア

(びじんこうそうどうけいをよろこぶ)

こぶ)

(2) 「意味読み」に近付けて耳に解る形にして

高士梅花定結隣^ム

(こうしばいかとけつりんをさだむ)

美人香草欣同契^ア

(びじんはこうそうとどうけいをよろこぶ)

よろこぶ)

(3) 「結隣」「同契」の音読みをさらに分けて読めば

定結隣^{マルアニヲ}

(りんをむすぶにさだまる)

欣同契^{ブンシユルヲ}

(けいをおなじくするをよろこぶ)

となろうが、この二句は熟語でもあるので前項(2)の音読「けつりん」、「どうけい」と読めば語調、対句の面からも妥当であろう。

(七) 解釈、意味

(1) (1)に記したように、この二句は仙床寺本堂にふさわしい主題の表現であろうとの仮説に立つて語句をたどってみたが、「美人香草」は素材読みの段階で「美女」

「香りよい草花」のとりあわせが対象となり、一般的通俗的なイメージが先行して、一句の「高士」「梅花」のもつ高い、主題性とはちぐはぐになり混乱していたところ、「美人香草は君主君子」(四)との説明を大漢和に見出し、一気に全てが氷解した思いであった。(三)の語注をそれぞれ選びながら句の構造に添って訳を仕上げる。

(2) 「読み」は前項(六)(2)を取り入れ「書き下し文」と「訳」を次のようにする

高士は梅花と結隣を定め、美人は香草と同契を欣ぶ
人格高潔の人と梅の花とは親しみあうことでやすらぎ、君主と賢臣は深い交わりをもつことを喜ぶ

(八) まとめ

床岡岡田の里には春に先がけて白梅は香るけれども、かつての日本一流の大書家の生家は今は、一片の痕跡

さえ見せない。戦時色たけなわの中にあっても羽織袴を端然と着こなして清筆を執っていたという「高士」「御手洗南溪」には、あるいは楚国屈原の姿が髣髴していたのかも――

『やんぬるかな、国に人無くわれを知るなし』

〔離騷〕最終句〕



御手洗南溪の墓
床木（仙床寺）

【後記】

1、この篆刻文の「出典」については文中でもふれたように今のところ不明である。関係情報などお気づきの方が居られたらご教示いただければありがたい。

2、仙床寺田中教道師には南溪略歴の提示など何かとご便宜をはかっていたいただき感謝に堪えない。また同じ弥生町の古藤田大先生は「書家御手洗南溪」を発掘・顕彰された功績の人であるが、資料、調査などで懇ろなご指導を賜り深く敬意を捧げたい。

3、このたびの碑石建立は弥生町の文化事業の一環であり、今後も続けて計画されると聞いている。平成八年三月八日の除幕には町会議員全員の参加もあつて関心の高さを示していたように思えた。また、直接携わった町教育委員会の取り組みの熱心さに感動を受けた。弥生町のさらなる発展を祈つてやまない。

（平成九年十二月稿）